

# Book Review

## 顎口腔手術の麻酔科学 —手術の特性からみた全身管理法—

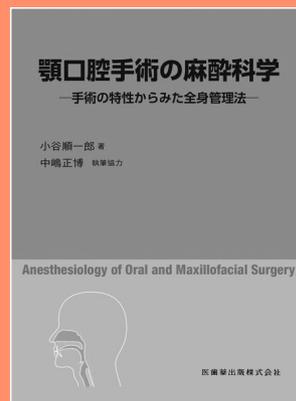
小谷順一郎 著/中嶋正博 執筆協力

● ● ●

Reviewer

金子 譲 Yuzuru Kaneko  
(東京歯科大学名誉教授)

A4 判変, 200 頁  
カラー  
定価 (本体 15,000 円+税)  
医歯薬出版刊



本書は、カラー図表の多用と臨床 memo, Column の囲みなどによって、臨床や最新の知見など、難解になりがちな内容が A4 判 200 頁のなかで的確に容易に伝わるよう工夫されている。この構成で全身麻酔、鎮静法がわかりやすく、熟読でスルメイカ的に読者の探究心を触発する奥深さも仕組まれている。

局所麻酔では中毒とアレルギーの臨床とともに最近の知見によった麻酔薬の作用機序が詳しく解説され興味深い。また術後の咀嚼不全患者への栄養管理は病棟看護師や管理栄養士も興味をもつだろう。歯科麻酔科医の初心者からベテランまで各熟練度に対応して役に立ち、また日本歯科麻酔学会認定歯科衛生士と共有したい書籍である。顎外科手術の丁寧な説明は同時に医科麻酔科医にとっても有用であろうし、病室管理の看護師には術後の上気道リスクの理解を助ける。

著者は上記の性格をもたせたうえで麻酔管理の「肝」である「気道」に焦点を当てた。歯科治療・顎口腔手術の

特性である「上気道」の周術期管理に著者自身の長年多数の症例経験と優れた自身の研究を基盤にして執筆されている。総論の気道生理から各手術の問題点に記述を深めている。本書の優れた特徴である。執筆に口腔外科医の協力を求めたことに執筆者の意図を感じる。たとえば両骨片固定が金属線から金属板に改善したことから術直後の顎間固定はフリーとなり吐物誤嚥のリスクは激減したし、術者の練達からこの種の手術は驚くほどの短時間と少量出血に至ったことなどは麻酔管理にとっての波及効果は絶大である。顎口腔外科と麻酔の関係を示す特性の一端である。

評者の全身麻酔 1 例目は口腔がん患者で下顎片側切除術と根治的頸部郭清術であった。術後 2 日目の日曜日に緊急気管切開されたが気道閉塞で亡くなられた。1960 年代のことである。1970 年代後半に導入された静脈内鎮静法は障害者や高齢有病者の麻酔学的管理にも適用され定着した。口腔外科では 1980 年代から顎変形症手術例が

著増した。こうした現象は歯科医療の進歩であったが同時に上気道問題が併存した。このリスク回避で口腔外科医としばしば軋轢をもたらしたが、協働しながら術中術後の気道確保に試行錯誤を繰り返したものである。こうしたなかで大阪歯科大学が上気道の研究に積極的に取り組んでいた。研究者が若き小谷順一郎講師であった。彼はその後に母校の主任教授として臨床に研究に成果をあげた。

日本歯科麻酔学会は 2023 年に設立 50 年を迎える。モニターは進歩し麻酔用具も改善し全身麻酔薬は一変しガイドラインも整備された。しかし、気道の解剖生理と、外科侵襲によった解剖変化や組織反応など上気道の課題は古来変わっていない。安全・快適な麻酔管理の進歩と専門性の必要性とは表裏一体である。「上気道」を焦点に歯科麻酔の臨床がオールラウンドにカバーされた本書は評者にとって Dental Anesthesiology がここまで来たかと感慨深い。本書によって歯科麻酔学が次のステップに進むことを期待したい。